

書道、華道、茶道から剣道など武術に至るまで、その道で習い事を始めるに当たり「どこそこに入門する」という言葉は今でも口にします。日本語でも「入門」という言葉が辞書でひもとけば「師の門をくぐって弟子になる」という意味があります。わたしたちの師は、イエス・キリストであり、キリストの道を歩んでいるのです。

イエスは「自身のことを「羊の門である」とおっしゃるのです。羊たちは日中は牧草地で草を食み、夜は外敵から身を守る安全な囲いの中に門をくぐってもどつていくのです。その門はわたしである」とイエスはおっしゃるのです。

しかしそこは一切危険のない隔離された安全地帯ではありません。盗人、強盗が入ってきます。「わたしより前に来た者はみな盗人、強盗である」といいます。この8節はペシタ、シリア語訳聖書では、「羊たちの群れがその声を聞かない限り、彼らはみな盗人である」とされています。羊とは神の民を表します。(詩23:79…)羊は、1匹では生きることができないので群れをなしています。しかし羊たちが盗人に気がつかず、その声に聞き付き従うという過ちを犯さないという保証はありません。そして過去に何度か道を踏み外し過ちを犯してきたのです。

7イエスはまた言われた。「はつきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより前に来た者(これまでユダヤ教の預言者たち)は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来た

のは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。

キリストの道とはいえ、外部と完全に遮断された道ではなく、さまざまな外からやって来る者があり、その道を歩んでいるひとびと、その集まりである教会も道を踏み外すことがあります。歴史を振りかえり、わかりやすい史実がありますので、何度も紹介していますが、第二次世界大戦に突き進んでいったドイツの例です：

1933年1月、ヒトラーが首相に就任し、半年後の7月にはナチスが政権をとったのです。そういうさなかの5月下旬のことです。ポーランドのグダニスク(ダンツィヒ)で、同僚の牧師を訪ねたクルト・ヴァルター牧師は、友人とナチスが選挙で圧勝したことをめぐり話していました。そのとき傍らで、友人の娘が絵を描いて遊んでいました。それは教会の絵でしたが、女の子が教会の塔の上にナチの旗を描き込んだのです。それを見た、友人牧師は彼女を厳しく叱ったのです。ところが数週間後にその牧師自らが、ハーケンクロイツの旗を自分の教会の塔の上に立てる始末だった、と回想しています。「ナチへの抵抗」：「雨宮栄一編訳47頁」

そんな情勢のもと翌年34年のことです。ボン大学教授だったカール・バルトは授業の前に「ハイル・ヒトラー」を叫んで敬礼することを拒否し、4月30日にバルトはボン市警察局に呼び出され尋問されました。5月26日には一時的に監禁されましたが、バルトはそれに屈せず、すぐさま、ドイツのプロテスタント教会の牧師たちに呼びかけて会議を呼びかけました。5月29日から31日の間、第1回全国告白会議がバルメンで開催されました、その会議において宣言が採択されました。それがバルメン宣言というものです。

われわれは、教会を荒廃させ、そのことによつてドイツ福音主義教会の一致をも破壊する「ドイツ的キリスト者」および今日のドイツ教会当局の誤謬(謬り)に直面して、次の福音主義的諸真理を告白する。『第1テーゼ』

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれもわたしによらないでは、父のみもとに行くことができない」(ヨハネによる福音書14・6)

「はつきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。：わたしを通して入る者は救われる」(ヨハネによる福音書10・1、9)

聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の御言葉である。

教会がその宣教の源として、神のこの唯一の御言葉のほかに、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならぬとかいう誤った教えを、われわれは退ける。

このバルメン宣言を読み、当時のドイツの教会事情について思いをめぐらせると、「盗人」とは、イエスをキリストとして信じる以外に救いの道を唱えるひとたち「ドイツ的キリスト者」を名指ししています。ドイツ的キリスト教とは、「ドイツのキリスト教会の講壇からユダヤ教の聖書とその原典に関する説教が語られることを、教会が許容し続けるかぎり、われわれもまた、キリスト教以前のドイツの宗教から説教の材料を選びだす不可侵の権利を有するも

のである。(河島幸夫『戦争・ナチズム・教会』、新教出版社94頁)

つまり、ドイツ的キリスト者は、こう主張するのです。教会の礼拝では毎週のように旧約聖書、ユダヤ教の聖書が説教でふれられるので、キリスト教がヨーロッパに入る以前のゲルマン民族の宗教から説教を語ることも重んじられるべきだというのがです。そのゲルマン民族とその精神、文化を尊重し、そこに根差して神に連なるという信仰を大いに展開すべきだというのがです。

このような戦争に突入していく特別な社会事情のなかでのごとですが、ここで問題となっていることは、危機的な状況だけの問題ではありません。むしろ平穏な時、常日頃に何かたいせつなものが壊れていったのです。経済的な繁栄を享受していた時代にドイツでは自由主義神学が跋扈し、教会の危機は始まっていたのです。おなじくわたしたちはバブルの時代を経て社会はどうだったか、教会はどうだったかを自らに問いかけて見る必要があると思います。

つまり富める時も窮する時も、平穏な時も喧噪の絶えない時も、教会が何を大切に行っているのかということが問われているのです。それは、「真の教会とは、何をもちて真に教会となるか」という問いです。言い換えれば、今日このときわたしたちは何を支えに「日を過すのか、終日を過すのか」ということが問題なのです。

ドイツにはドイツの社会があり文化があるそこに根ざした教会のあり方があってもよいはずではないか、日本には日本の文化に根ざした教会があってもよいはずではないで

しょうか?、と問われたら、平穏な時には、いいんじゃないですかと答えてしまってます。

私事で恐れ入りますが、青森の教会から呼ばれて、神学校に招かれ、この秋に60歳を迎えることもあいまって、同時に前任の教会に招かれてから15年を経ようとしています。この間、農村伝道という自分に課せられた使命を自覚しつつ歩んできたつもりですが、神学校での働きを振り返りかえり、深く食い込むような痛みをもって、総合的な報告をしたためています。その際の基軸は、具体的な活動や言葉には表れない、自らの信仰であることに気がつかされました。

そして、ヨハネによる福音書がこの10章で問題としているのは、教会とは何をもちて教会といえるのかと問う時になくてはならないことを示している箇所なのです

1「はつきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。2門から入る者が羊飼いである。3門番は羊飼いは門を開き、b::羊はその声を聞き分ける。c::羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。4自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。5しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」6イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

キリスト者の集まりが真実な集まりであるためには、羊飼いであるイエスの声を「聞く」ことによるのです(3b)。それはいかにして可能になるのでしょうかー羊飼いであるイエスが、ひとりひとりの名を呼ぶ、そこにすべての根拠があるのです(3c)。そして、羊たちはその呼びかける声を知るようになり、その声に従っていくのです(4)。イエスは、先だって羊たちを緑の牧場に連れて行かれます(4)。

わたしたちひとりひとりの名が、イエスに呼び集められたがゆえに今ここに集まっているのです。ですからこの集まりは、神が、イエスをキリスト、救いの主として遣わし彼をとおして、呼びかけ、語り給う、その声に聞くという、ただそのことよって存在するのです。神の語りかけを聞いたわたしたちが、何をなすべきか分からなくとも、自らの能力に自身がなくとも、過去に取り返しのつかない過ちがあろうとも、例え、傷を負い、あつるいは病を負っていても他の何事をもできなくとも、あるいは歳を重ね衰えの下り坂を歩んでいて、何事をも十分になすことができない、ただ聞くことしかできない、いや、あの、わたしたちの名を呼びご自分のものに招かれる声を聞くことができるならば、それで十分なのです。そこにわたしたちのひとりのはじまりがあり、週日があり、その日々に教会は確かに存在してきたのです。

ただ、ただ、わたしたちは、イエスの声に聞き、先頭に立って進み行くイエスに従っていくのです。